

氏名	もり 森	ひろ 博	ゆき 行
学位(専攻分野)	博士(文学)		
学位記番号	論文博第442号		
学位授与の日付	平成15年1月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
学位論文題目	「夕日と芳草—中国古典文学論文集—」 及び「詩人と涙—唐宋詩詞論—」		
論文調査委員	(主査) 教授 川合康三	教授 平田昌司	助教授 木津祐子

論文内容の要旨

本論文は、二つの題目から構成される。

I. 夕日と芳草—中国古典文学論集—

II. 詩人と涙—唐宋詩詞論—

Iは三編から成る。

第一編、魏晉詩における夕日と、この主題の補足である『詩経』における夕日

第二編、晚唐五代の詩に現れた芳草

第三編、邵雍の詩に現れた芳草と太平

IIは三編から成る。

第一編、唐代の詩人とその詩

第二編、韋莊の「謁金門」と「清平樂」

第三編、陸游の「釵頭鳳」と「清商怨」及び陸游の詩に現れた太平の諸相

次にIの第一編・第二編・第三編、及びIIの第一編・第二編・第三編について、章ごとに具体的に述べる。

Iの第一編。第一章は、夕日を意味する熟語が最初に現れた詩とその意味、及び関連する問題について論ずる。夕日を意味する熟語が最初に現れたのは、魏の徐幹の「情詩」の一句「落日は階庭を照らす」である。これ以前の詩、『詩経』には熟語のみならず、夕日を意味する表現さえないが、『楚辞』および漢代の作品になると、「日は忽忽として其れ将に暮れんとす」（「離騷」）のように、太陽が移行の相において歌われることがある。「落日」の句は、夕日をいわば静止した状態で表現するという意味において、夕日表現史上、一步を踏み出したといえる。ただ、この句には漢の班婕妤の「自傷悼の賦」の影響が強く、叙景というより叙情性の濃い作品である。この叙景という点でもう一人重要なのは、徐幹と同時の王粲である。彼の「山崗に余映有り」（「七哀詩・其二」）の「余映」は、夕日の残光であり、「落日」の句と同様のことを指摘できるが、王粲の詩句には、夕日史上初めて夕日を美的なものとして鑑賞する態度が伺える。次に魏晉詩の夕日について、二つの点を指摘している。一つは、夕日を衰亡するものの比喩あるいは象徴とする観念が、この時代に確立すること。二つは、夕日は、「～景」という表現が多いこと、また夕日を表現する時、「白日」の語と結びつけることによって表されることが多いこと。「白日 西山に入る」（楊方「合歡・其三」）など。この二つの点は、「～景」という表現を除けば、すでに『楚辞』に見られる。しかし、徐幹や王粲の詩句、また比喩・象徴としての夕日に限定されてはいるけれども、「～景」という表現などを合わせ考えれば、魏晉時代の夕日は、『楚辞』的夕日からの離脱を示すものといえる。

第二章と第三章は、補足として『詩経』における夕日を論ずる。『詩経』にはなぜ夕日が歌われていないのか、という点に関して、第二章において、『詩経』時代の人々の観念には殷代の影響が強く、夕日は不安な夜の訪れを告げるという観念があって、そのために夕日を忌避したのではないか、第三章において、『詩経』にも夕日は歌われていたが、編纂の過程で脱落したのではないか、という観点からそれぞれ論ずる。

Iの第二編。晩唐五代時代の詩に、芳草という言葉が頻出する。この事実は、第一章、碧草と緑草、杜甫の詩におけるみどり草の考察が契機となる。杜詩には、碧草は6例、緑草は0例。本章の目的は、杜甫がみどり草を表現する場合、緑草ではなくて碧草を選択した理由の解明である。緑草は、班婕妤の「自傷悼の賦」に描かれている暗いイメージが纏わりつく古い言葉である、それに対して碧草は、六朝時代に出現した新しい言葉であり、暗いイメージはまったくなく、いかにもみどり草がもつ新鮮な息吹を感じさせる語感を有しているためである、というのが論者の解釈である。杜甫の鋭い直観力や該博な知識と共に、伝統的な観念である人事と自然に対する対立的な考え、人間の営為は空しいものであるが、草木は永遠の生命力をもっているという思想が、碧草選択の背後にある。

第二章は、晩唐五代の詩に、芳草という言葉が頻出した理由と意味の解明である。

先ず先秦から清代までの詩を資料にして、芳草が晩唐五代の詩に突出して多量に現れることを確認する。次になぜ晩唐五代の詩に芳草が多量に出現したかを考える。政治的社会的に不安定な時代であるこの時代に生きていた人々が、何か安定したものあるいは安らぎを与えるものを求める心の反映である、と結論する。しかし、人々はなぜ芳草にそれを求めたのか。一つには芳草がもつかおりやおいという属性による。専門家の見解によれば、かおりやおいには、人の心を弛緩させる作用がある。もう一つは、『楚辞』の影響である。「何れの所にか芳草無からん」という表現を含む、特に屈原の作品といわれる『楚辞』にかぎって芳草が歌われる。上に引用した一句は、本論の立場から言えば、芳草は安定しているという思想である。以上の二つの点を論拠にして、具体的に作品を取り上げることによって、晩唐五代時代に芳草が頻出する理由と意味を述べる。

第三章は、第二章の補編である。盛唐の詩人崔顥の詩「黄鶴楼」の一句「春草萋萋鸚鵡洲」の「春草」が、ある文献では「芳草」となっている、どちらが本来の表現であったのかということ、晩唐五代に芳草が多量に出現する事実と関連させて論ずる。合わせて五代から宋初にかけての徐鉉の詩に現れた芳草を取りあげ、彼の詩における芳草は雑草に変質してしまった、これは『楚辞』以来の芳草史の終焉を告げるものである、と論ずる。

Iの第三編。第一章は、第二編の続編であり、邵雍の詩に芳草が頻出するという事実が出発点である。彼は道学者であるが、この論稿の特徴は、邵雍の芳草が歌われる詩を年代順に分析することによって、彼の思想遍歴の跡を、芳草をキーワードにして考察したことである。芳草は、邵雍にとって単なる雑草にすぎなかった。ところが、60歳の頃を前後にして、芳草は仙界を彩る光景として歌われるようになる。つまりこの地上を仙界と考える思想が邵雍に生まれ、そして確立するのである。地上こそ仙界であるという思想は、必ずしも邵雍独自の思想ではないようだが、芳草論の立場から言えば、こういう思想を芳草と結びつけたところに歴史的な意味がある。

第二章は、やはり邵雍の詩に頻出する太平という言葉がキーワードである。この論稿においては、彼の太平観を論ずると同時に、太平を通じて新法との関わりを論ずる。邵雍は59歳、熙寧2年のころ、この世を太平と感じて以後、67歳、熙寧10年に亡くなる最後まで、太平を謳歌し続ける。彼がこの世界を太平と感じた時期と、この地上こそ仙界であるという思想が確立した時期とはほぼ一致する。ところが熙寧3年4年5年の3年間にわたり、太平を詠じた作品が一首もない。それはなぜだろうか。熙寧3年4年5年は、王安石の新法が精力的に推進させていた時期である。邵雍は、新法に対して猛烈に反対して中央の政界を退いた司馬光を代表とする旧法の立場に立つ人物である。しかも邵雍は、司馬光と親しく交際していた。邵雍は個人的にはどうあれ、政治的には太平を歌うわけにはいかなかったのである。その証拠に、王安石は熙寧7年に中央の政界を退き、この時をもって、事実上、新法は瓦解するが、これ以後、再び邵雍は死ぬ間際まで、盛んに太平を歌っているのである。

IIの第一編。第一章は、陳子昂の「感遇」詩を取りあげる。「感遇」詩は、則天武后当時の政治や社会を批判するという一面をもっている。本章は、「感遇」詩がもつ政治・社会批判を分析すると同時に、彼の世界観という観点から考察する。彼の世界観によれば、この世界は、『易』に示されるように、天道なるもの、彼の表現を用いると「大運」の作用によって、永遠に循環・消長を繰り返す。そして、このような天道の作用の結果として現れるすべての現象は、人間の意志や能力を超えた不条理なものである。たとえ聖人といわれる人物であっても、要するに現象の一つに過ぎない人間である以上、人間の理性や叡智をもってしても、いかんとも対処しがたい。結局、人間は天道の前では無力である。彼がこのような世界観をもつに至ったのは、政治的に不遇であった点と深くかかわりがある。

第二章は、李白の「烏夜啼」詩を映像的な視点を取り入れることによって、従来、様々に解釈されてきた「窓を隔てて語る」に対して、一つの解釈を示したものである。

第三章は、杜甫の詩における「陶謝」（陶淵明と謝靈運）という並称の意味を、真という言葉を手がかりにして論ずる。陶淵明も謝靈運も、彼らの詩に真を使用している。しかし、同じく真という言葉を使っても、ふたりの間には、意味内容において対照的な違いがある。陶淵明の場合は、心の中にある主観的な真実を、謝靈運は心の外にある客観的な真実を表す。「此ここに還た真意有り」（陶淵明「雜詩二首・其一」）、「真を蘊めども誰か為に伝えん」（謝靈運「登江中孤嶼」）。ところで杜甫も陶淵明と謝靈運に対して、如上のようなことを考えていたと思われる。典型的な例証は杜甫の「石櫃閣」詩の一聯である。「優游謝康樂，放浪陶彭沢」。「優游」は、『詩経』「白駒」に基づき、外に出て自由に楽しむことを意味する。「放浪」は、王羲之の「蘭亭集の序」に基づき、ひとりで気ままに心の中で楽しむことを意味する。杜甫は、このように陶淵明と謝靈運を対照的な詩人と考えていたが、もう一方で二人を一つの統一体とも考えていた。それを如実に示すのは、杜甫が真なる自然を表現した「真を蘊んで遇う所に愜う」（「陪李北海宴歷下亭」）である。この句は形式的に言えば、表現は、謝靈運に、内容は陶淵明に基づく。謝靈運的な真と陶淵明的な真を同時に表現することによって、杜甫は彼がイメージする自然を表現することができたのである。杜甫の「陶謝」という並称には、以上のような意味がある。

第四章は、岑参の西域詩を論ずる。岑参は西域体験を二度したが、一度目と二度目との間に大きな違いがある。この点に関して、彼の詩に現れた涙という言葉を経験を媒介にして考察する。具体的に言えば、一度目の時に詠じた詩に現れる涙と、二度目の時の涙との間に量的な違いと、質的な違いがある。これは、経験と未経験の違いによってもたらされた結果であるというのが、一つの結論である。更に質的な違いについて言えば、本来、送別詩は送別される人に対する餞として作られるものである。にもかかわらず、一度目の時には、他人を送別するにあたって、送別される人を顧みる余裕がまったくないままに涙を流していることである。この質的な違いは、また彼の作品の制作時期を推定する一つの手がかりになるという点で無視できない。

第五章は、杜牧の息夫人を詠じた「桃花夫人廟に題す」詩を論ずる。この詩は従来、息夫人に対する批判であると解釈されてきた。それに対して、杜牧の意図は、息夫人を批判することにあるのではなく、杜牧以前の息夫人を詠じた詩が彼女に好意的同情的であったのに対して、ただ歴史的事実、息国が滅んだのは息夫人のせいではないかということ、エスプリのきいた表現で述べたに過ぎない、と述べる。またこの問題に関連して、息夫人を批判して作ったのは、汪遵の「息国」詩が最初である、ということを含わせて論証する。

附録は、第三章で取り上げた陶淵明と謝靈運について、ユングの内向型・外向型理論を応用して、対照性という点に焦点を合わせ、二人の対照性を様々な面から論ずる。

Ⅱの第二編。第一章は、王新霞選注『花間詞派選集』（北京師範学院出版社 一九九三年）の書評である。詞における構成という観点から、韋莊の「謁金門」詞に対する解釈上の問題点を、特に取り上げて指摘した。

第二章と第三章は、ともに詞における構成の問題について論ずる。第二章は、主に韋莊の「謁金門」詞「空相憶，無計得伝消息，天上嫦娥 人不識，寄書何処覓。新睡覺来無力，不忍把伊書迹，滿院落花春寂寂，斷腸芳草碧」を取りあげ、前関は男の立場から、後関は女の立場から歌われていると論ずる。第三章は、主に韋莊の「清平樂」詞「春愁南陌，故国音書隔，細雨 霏霏梨花白，燕払画簾金額。尽日相望王孫，塵滿衣上淚痕，誰向橋邊吹笛，駐馬西望銷魂」を取りあげ、前関の前半二句は男、後半二句は女、後関の前半二句は女、後半二句は男という構成になっていると論ずる。そして男の部分は男の歌い手が、女の部分は女の歌い手が、歌うように作詞されていたのではないか、という指摘がこの論稿の特徴である。

Ⅱの第三編。第一章は、第二編の続編であり、陸游の「釵頭鳳」詞は、前関は男、後関は女、という構成になっていると論ずる。専門家の間で多数を占める、いわゆる想像説に対する批判である。

第二章は、陸游の「清商怨」詞の制作時期と制作意図の新解釈が主題である。従来、この詞は乾道8年11月、南鄭から新しい任地成都に赴く道中、南鄭の幕府が解散したのを悲しんだ陸游が、閨情に仮託して彼の政治的心情をうたったものとされてきた。それに対して、この詞は、乾道8年9月、彼が南鄭にいた時に行った公務の旅の折に、まだ彼のもとに到着していない妻を思って作った、という見解を、彼の同時期に作られた詩と、南鄭から成都までの行程を勘案して述べる。論者と同一見解を述べた文献はない。

第三章は、本来、Ⅰの第三編第二章の続編である。陸游の詩に夥しく現れる太平という言葉の意味を、全国の太平・半壁の太平・心の太平の三種類に分けて定義した上で、特に心の太平を問題にして、「空しく太平の民と作る」、「幸民」、「太平に老ゆ」という表現を取りあげ、彼の晩年の心境を考察する。彼は農村での生活を楽しむ一方で、時に「空しく太平の民と作る」という句に示される悲しみの気持ちが、心の中にふと横切ることがあったのではないかと結論する。

附録は、詞の集大成者といわれる周邦彦の詞に見られる卑俗な一面の紹介である。

Ⅱの最後として、Ⅱの題目を「詩人と涙」としたのは、各論稿に涙が共通の言葉として現れるからである。

論文審査の結果の要旨

本論文はその第一部が『夕日と芳草——中国古典文学論集——』（現代図書、1999）、第二部が『詩人と涙——唐宋詩詞論——』（同上、2002）と題して近年公刊されたものであり、論者が三十年近くにわたって発表してきた、中国古典文学に関する論考の集成である。

本論文の特徴として少なくとも二つの点を挙げなければならない。一つはその研究対象が極めて広範な領域に及んでいることである。直接に考察の対象として取り上げたものだけでも、『詩経』から始まり南宋の陸游にまで至っている。今日の日本では、これだけ広い範囲を一人で扱うことのできる研究者はほかにいないと断言してよい。さらに個々の研究の必要上から甲骨文字、音韻学、近現代文学にまで視野を広げていることが論考を通して知られる。この広範さは論者が長年にわたって篤実な研究を積み重ねてきたゆえの達成であり、これには敬服せざるをえない。また研究領域の広いことは、本論文の場合、手当たりしだいに広げるとか、もしくは逆に広い範囲からつまみ食いするとかいった態度によるものではなく、一つの研究からおのずと次なる問題が生まれ、そこからまた別の問題が生じるといった、必然的な連関によって広大な領域に拡がったものであることも併せて指摘すべきであろう。論文全体を通して読むことによって、全体が有機的な繋がりをもっていることがよく理解できるのである。

特徴の二は、論者の研究方法が詩を周辺の事象とか詩人の人生とか、作品の外側から詩を論じるものではなく、あくまでも作品そのものに即して、ことに詩のなかの語彙に焦点を当てて考察を進めていることである。たとえば書名に見える「夕日」「芳草」「涙」といった詩語にあくまでこだわり、その語の来歴や文脈のなかで帯びる意味合いを仔細に検討することに徹している。ここまで徹底して詩語に限定して論を立てているのは、中国古典文学研究のなかで希有なことである。文学研究の方法の困難さゆえに、中国文学研究ではいまだに作者の伝記研究なり時代背景なり、いわば作品の外部の研究をもって文学研究と思い込んでいる、ないしはそれに甘んじている研究が少なくない。作品の文学性そのものを熟視する研究、あるいは少なくともそれを志向する研究は多くを見られないのが現状であるが、論者のように禁欲的にまで詩語に踏みとどまろうとする態度は、作品研究にとって一つの有効な手段ではあろう。

このような特徴をもつ本論文のなかで、論者は重要な指摘を次々と提起している。第一部から挙げれば、第一編「夕日考」では沈んでいく太陽への関心が『詩経』にはまったくみられず、魏晋の時期に至って夕日を美しいものとして見る態度が生まれていること、第二編「芳草考」では同じく「みどりの草」を意味する「緑草」「碧草」の語が、六朝期にはもっぱら「緑草」の語が用いられ、そこでは人の訪れない空閑を守る女性の悲哀と結びついていたのが、唐代では「碧草」の語がとって代わり、それが帯びる意味もおおおと生える自然の生命力をあらわすものになること、さらに晩唐五代の時期には「芳草」の語が頻出するようになること、などである。これらは論者の指摘を得て初めて気付かされる詩の語彙の変化であり、こうした指摘だけでも十分に意義あるものと言えようが、しかしそれに対して論者が挙げる理由は性急に過ぎるくらいが時にないでもない。『詩経』に「夕日」が見えないのは、忌避されるべきものを詩に唱わない、或いは伝承されていた詩篇を刪定した刪詩の過程で切り捨てられたためであるというのは、論者も言うとおりの「仮説」の域を出ないだろう。晩唐五代の「芳草」愛好は不安な時代において確かなものに寄りすがろうとした心情のあらわれであるとする結論も、安易にすぎて説得力をもたない。若い時期の論考に見られるこうした不十分な結論は、今後さらに考究を深めることを期待したい。

第一部第三編「邵雍論」は先の「芳草」の考察に続いて、北宋中期の邵雍の詩を対象とするが、六十歳前後を境として急激に「芳草」の語が頻見されるようになること、その「芳草」は太平の象徴として描かれていること、それはこの年齢に至って現実の世界のなかにこそ楽園はありうるのだという邵雍の哲学が確立したことと重なり、彼の世界観を反映しているこ

と、旧法党の立場に立つ邵雍は新法党が権勢を振るった時期に限って「芳草」の語が消えることなど、ここにも興味深い指摘が数々連ねられている。「芳草」という一語の使用から発して、邵雍の世界観まで導き出されるのは、詩語研究の成功した一例に数えられよう。

第二部はことにその第二編の「詞」を扱った部分が精彩に富む。楽曲に付けられた歌詞である「詞」という韻文形式の研究は日本ではまだはなはだ乏しいが、論者は「詞」が本来そうであった歌謡文芸という性質に立脚して、唐末の代表的な「詞」作者である韋莊、南宋の大詩人である陸游、その二人の「詞」のなかでもとりわけよく知られた作品に新たな解釈を繰り広げる。すなわち前闋（前半部）は男、後闋（後半部）は女の立場から唱う、或いはまた前闋・後闋それぞれの内部においても男女が掛け合いのようなかたちで交互に唱う、と一首の「詞」のなかの唱い手を分けて読むことを提起するのである。たとえば陸游の「釵頭鳳」詞の場合、従来は陸游が離縁せざるをえなかったかつての妻唐氏への思いを綴ったという解釈が通行しているが、それは陸游と元の妻との愛情物語に縛られた思い込みによることを、論者はほかの「詞」、さらには歌謡的な唱いぶりをのこしている詩において男女掛け合いの構成はよく見られることを広く引きながら論じる。論者のこの解釈によって、これらの「詞」は牽強付会を免れ、自然な理解が得られると言えよう。論者の指摘は単に当該の作品に新たな解釈を与えたにとどまらず、従来の読み方には詩人と作品内部の唱い手を同一視し、詩や「詞」は作者自身の体験にほかならないとする態度への疑問、また「詞」及び歌謡文芸に伴う虚構性の問題など、韻文学全体にとって考えるべき大きな問題を懐抱している。

以上のように、本論文は詩詞のなかの語彙、表現を精査することを通して、先秦から宋代まで長い時期にわたる文学の展開の諸相を追求した労作である。論者の結論のなかには十分な説得力をもたない箇所も含まれるが、膨大な範囲を対象として精密に考察を進めたその力量は、瑕疵を補って余りあるものであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお2002年12月10日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。